

北朝鮮の核放棄と旧ソ連衛星国の核放棄を比較する

漢和防務評論 20180706(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

現在、米朝間で北朝鮮の非核化交渉が行われていますが、過去にソ連崩壊に伴って旧ソ連衛星国のウクライナ、白ロシア、カザフスタンでも核兵器の破棄作業が行われています。

漢和防務評論誌は、両者の違いを分析し問題点を指摘しています。

非核化交渉に合わせて日朝正常化交渉を進める場合、拉致問題と北朝鮮に対する戦後賠償問題を解決する必要があると漢和は指摘しています。

平可夫

金正恩は、3月に北京を訪問した際に初めて次のように述べた：朝鮮半島の非核化は前2代北朝鮮指導者の遺訓である。もし南朝鮮、米国が善意を以て対応するならば”段階的な”核放棄は可能である、と。なんと巨大な”まき餌”(誘いの餌)であることか。したがって今回大国は見事に”まき餌”にひっかかった。

KDRは明確に認識している：カダフィー、フセインの悲劇のあと、北朝鮮は核を放棄しない、と。朝鮮労働党の内部学習会では、北朝鮮の核兵器を”民族遺産”と称している。

”段階的な核放棄”とは何か？時間制限があるのか？30年でも50年でも”段階的”である。技術面から見れば、北朝鮮の核放棄問題はウクライナやカザフスタンの核放棄問題に比べはるかに複雑である。表面上、ウクライナ、白ロシアが保有していたICBMの数は多い。しかし詳細に分析すると、この2国の核放棄問題は、政治上、技術上、財政上からも難しくはなかった。核を放棄せざるを得ない状況にあったからである。本誌記者は、何度もウクライナのICBM発射サイロ、指揮センターを訪問したことがある。

核兵器の生産、核基地及び地下発射洞窟の建設には膨大な予算が必要である。そしてこれらの施設を破棄する場合も同様に巨大な財政負担が必要になる。誰が北朝鮮の核施設の破棄を支援するのか？誰が金を出すのか？米国、日本、中国？誰が支出を希望するか？これが問題の鍵である。

参考までに。ソ連時代、ICBM発射サイロを1個建設するのに、4000万ドルの資金が必要だった。(1ルーブル：3米ドルで計算)

一方核発射サイロ1個を破棄し、埋め戻し、他に使用可能な普通の土地に戻すには、少なくとも1000万ドル必要だった。1995年前後、本誌記者はウクライナ国防部和基地を訪問した。まさに破棄されつつあった発射サイロは電力が極度に欠乏していた。当時国防部長 KUZMUK 大将は次のように述べた：米国は発射サイロの破棄に5億ドル提供することを承認した、と。しかし後で協定の執行状況を見ると、米国が提供した金額は1.5億ドル以下であった。現在、ウク

ライナにある元の発射基地は、多くは資金が欠乏し、ミサイルを撤去し発射サイロを破棄しただけである。大量の土地は有効に利用することができないままになっている。これでは円満な核放棄とは言えず、当時のウクライナ政府の幼稚さに驚くのみである。

現在北朝鮮には ICBM、MRBM（中距離弾道ミサイル）の発射サイロはない。しかし洞窟を利用した指揮センター、発射陣地を建設している。やはり建設費は巨大であったろう。これらを破棄するのは簡単ではない。第一に破棄すべきものの内容である。北朝鮮はウクライナに比べより複雑である。

最初にウクライナの状況を見よう。ウクライナの核放棄の協定は 1994 年に締結された。

1994 年、ロシア、米国、ウクライナの大統領は、モスクワでウクライナ国内の全ての核兵器の破棄についての協定に署名した。協定に基づいて、ウクライナは 7 年以内に全ての核兵器をロシアに運び込んで破棄することになった。交換条件として、米国は、(援助に変えて) 抽出された核弾頭の濃縮ウランを発電用として優先的に購入することになり、また核兵器を抽出するため 1.75 億ドルの補償を提供した。同時にウクライナに対し 1.55 億ドルの経済援助を行った。ロシアは、ウクライナが比例配分に基づいて米国に輸出した濃縮ウランからの収入を得ることに同意した。このほかウクライナは、ロシア、米国、中国の核安全保障を獲得した。

ウクライナが保有する核兵器の数量

ウクライナ：176 個の ICBM 発射機、1240 個の核弾頭、3000 件の戦略核兵器、SS-19 及び SS-24 型 ICBM の発射サイロがそれぞれ 130 個及び 46 個。TU-95S 及び TU-160 型戦略爆撃機がそれぞれ 25 機及び 19 機。SS-24 型 ICBM が 160 発。130 発はすでに第一段階の「米ソ戦略兵器削減条約」で破棄され、残りの 30 発は封鎖状態にあった。

核破棄作業：130 発の SS-19 及び 46 発の SS-24、600 発の KH-55 巡航ミサイルから 1300 発の核弾頭を除去した。これらの核弾頭は 1996 年 7 月以前にすべてロシアに運ばれた。ロシアでは原発用の核燃料に加工され、ウクライナに戻された。1998 年 6 月 5 日、ウクライナは発射サイロから最後の 1 発の SS-19 を除去した。また 2001 年 4 月 18 日、発射サイロから最後の 1 発の SS-24 を除去した。同年 10 月 30 日、最後の SS-24 用発射サイロを破棄した。このことから破棄作業が順調に行われたとしても、ウクライナは核破棄作業に 10 年近く費やしたことが分かる。

ウクライナはなぜ核を放棄したのか？その理由は次のとおり：

1. ウクライナの核兵器の運用状況は、北朝鮮とは全く異なる。前者は、主としてモスクワ中央の指揮を受けていた。第一、モスクワの指示が無ければウクライナの ICBM は発射不可能であった。発射暗号は如何に使用されたのか？ソ連共産党総書記と国防部から暗号を得なければ、全ソ連の ICBM は発射できなかった。また発射操作の手順は、モスクワ及びキエフ軍区最高級官員の一部のみが知っていた。しかもキエフ軍区、ウクライナ、カザフスタン、白ロシア国内の核ミサイル技術者、指揮要員の 90%は、モスクワ中央から派遣されたロシア

人か或いはロシア系ウクライナ人であった。10%以下の下層兵士のみが現地採用であった。

この点が、ウクライナ及びその他の CIS 国家が ICBM と核弾頭を徹底破棄せざるを得なくなった理由である。

2. このほか、この 3 ヶ国は核兵器、核弾頭を如何に維持補修していたのであろうか？3 ヶ国の経済は、ソ連解体後破産状態に直面した。ウクライナは対外負債が 100 億ドルあった。外国からの経済援助が急務だったのである。

3. 最も根本的な理由：ICBM 及び核弾頭生産の主要な基地はロシアにあり、ウクライナの南方機械工場は ICBM 及び一部の部品の生産を行っていただけであった。カザフスタン、白ロシアは ICBM 及び核弾頭を生産、補修能力は全くなかった。

北朝鮮の核兵器、弾道ミサイルは、100%自国製である。維持補修も自力でできる。

ソ連の軍事工業体系が崩壊した後、ウクライナの南方機械工場も ICBM の組立ができなくなった。維持補修工場も破産したため、ウクライナが貯蔵する多くの核弾頭は核安全の問題に直面することになった。直ちに処理しなければ、核漏洩の問題が発生する可能性が高くなった。

4. 核兵器を保存する戦略理論など存在するのか？敵は誰か？これらの問題は、新生国家として、研究したことがなかった。ロシアも西側も敵ではなかった。

5. 国際社会の経済援助という名の”まき餌”（誘いの餌）。建国したばかりのウクライナ及び白ロシアにとって当面核兵器の保存よりも重要なことは、ロシア、欧州及び米国から経済援助を獲得することであった。そうしなければ国家として独立できなかった。次に重要なことは、核不拡散に対する国際社会の要求と圧力であった。ソ連解体後、核兵器を保有する白ロシアは 1992 年に核兵器の放棄を宣言した。カザフスタンは 1995 年に宣言した。ウクライナは 1996 年に宣言した。これら核兵器の核弾頭はすべてロシアに運ばれた。米国及びロシアは、核兵器を放棄した国家に対して優遇措置を採った。ウクライナの核放棄の見返りにロシアは引き続き天然ガス、石油の供給を継続した。これらの資源の価格は相当低く抑えられた。米国は 1.55 億ドルの経済援助を提供した。ウクライナが獲得した最も重要な援助は国際通貨基金からの 15 億ドルの援助と世界銀行からの 7 億ドルの援助であった。このように概略推算すると、ウクライナが核放棄によって直接得た代価は 25 億ドル前後になる。ここには核兵器、核弾頭のロシアへの運搬費用、弾頭から抽出した濃縮ウランの米国への売却代金、ロシアで民間原発用には濃縮ウランに加工した費用、ロシアの TU-95 等の戦略爆撃機を返還する費用等は含まれていない。

全体の経費は 30 億ドル前後と考えるのが妥当であろう。

北朝鮮については、核放棄の全過程、費用について、要求額はさらに高額になる。第一、破棄する核施設がウクライナよりも多い。その中には次のものが含まれる：

1. 核弾頭、核ミサイルの部品、組立工場の破棄
2. 核材料工場、地下施設の破棄
3. ICBM 等、弾道ミサイルの解体

4. すでに就役している核弾頭の解体
5. 海軍ミサイル発射潜水艦の解体
6. 海軍核ミサイル、核弾頭の解体
7. 各種格納庫、指揮センターを含む全ての核兵器基地の破棄

これらの核破棄のための作業の多くは、ウクライナの場合、存在しなかった。核破棄作業の過程で、関係各国が要求する重点項目それぞれ異なる。米国は、第一に ICBM と Guam 島に到達する MRBM の破棄を要求するであろう。日本及び中国は、両方とも要求するはずである。韓国は、短距離弾道ミサイル、戦術核兵器の破棄を特に求めるであろう。

このほか核弾頭の解体はどこで行うのか？抽出した核材料はどこに運ぶのか？誰が費用を支払うのか？

核放棄の過程で、北朝鮮はウクライナのように”誠実”に動くはずがない。必ず大声で大国が受け入れられないような無理な要求を出すであろう。

例えば、核放棄と日朝関係正常化とを連係させるべきかどうか？連係させる場合は、拉致問題と北朝鮮に対する戦争賠償問題を解決する必要がある。もし連係させない場合は、北朝鮮は中距離弾道ミサイル温存する理由を主張するであろう。

カザフスタン及び白ロシアが核を放棄した理由及び過程は、ほぼ同じである。カザフスタンは、全部で 104 発の SS-18 大型弾道ミサイル、40 機の TU-95 戦略爆撃機、370 発の KH-55 巡航ミサイルを持っていた。

ウクライナと異なるところは：カザフスタンは、ウクライナに比べこれらの武器の維持補修能力、管理能力がなかった。KH-55 及び SS-18 の最終組立は、ウクライナで行われていたからである。

カザフスタンの核破棄作業の全体は、1996 年 8 月に完了した。しかもこの過程はロシアの専門家の直接参加の下に進められた。核破棄作業は、相当充実した経験が必要である。現在、この経験を有する国家は米国とロシアのみである。

国際社会の非核化を縦観すると、多くは不成功に終わっている。南アフリカは唯一の成功例である。南アフリカと北朝鮮の状況の違いは大きすぎる。南アフリカの最後の白人政権が米国及び英国の圧力の下、自ら 6 発の原子爆弾を破棄した。

注目すべきことは：ウクライナがクリミアを失った後、ウクライナ国内で”核放棄を後悔し”、”再び核武装”の声が聞こえることである。未だ弾道ミサイル生産の基礎、技術は残っている。核兵器製造は、材料がないので、現在は不可能に思える。

北朝鮮の核放棄は大量の資金の注入を意味する。

以上